

2016/9/4

テーマ「写真の未来」

パネラー パク・クァンリン(韓国江原道春川市在住写真家)

福島多暉夫(米子市在住写真家/米子市写真家協会顧問/JPA 理事)

秦野のぼる(倉吉市在住写真家)

コーディネーター

計羽孝之(倉吉市在住版画家/倉吉文化団体協議会会長)

## パネルディスカッション「写真の未来」進行案

### パネルディスカッションの目的について

倉吉文化団体協議会は、これまで韓国江原道芸総の写真作家と交流を重ねてきました。今年度は、江原道芸総写真家協会のパク・クァンリン氏(韓国写真作家協会諮問委員)をお招きし、倉文協所属の写真作家たち及び県内写真作家と、「写真の未来」について意見交換会を行います。今回テーマとしますのは、シリアスフォトグラフィー(自己表現)であり、一般的には非現実的で、見てもわからない、解釈が付かない類の写真です。

現代の最先端写真界では写真家や美術家たちが現代美術の文脈で写真を制作し、多くの写真展が開催され、美術の一分野と認識されています。今や写真は、「撮る」時代から「作る」時代へと移行して久しいものですが、現代写真の変遷を見直すことで、未来の写真のあり方が見えて来るのではないかと考えます。このパネルディスカッションは、二つの基調提案を通じて、現代写真表現の中にある特徴を概観し、現代美術との関係性や写真表現の多元性を視野に入れながら、現在進行形の写真と、これからの写真表現(写真の未来)の可能性を考察します。そして、鳥取県写真界で活躍する三人の作家と江原道芸総のパク氏を交えて、語り合い、写真作家としてのスタンスを見つめ直すのが交流の目的です。

#### ① 基調提案⇒パク・クァンリン氏(韓国写真作家協会諮問委員)

「写真の絵画的表現と発想」 (10 分間) Landing Time 10min

別紙資料参照(写真の絵画的表現と発想)

#### ② 基調提案⇒松原幹夫(写友「創造」)⇒資料あり

別紙資料参照(「被写体との対話で写真に魂を入れる」)(5 分間) Landing Time 15min

#### ③ パネラーの自己紹介⇒各自 3 分 (12 分間) Landing Time 27min

松原幹夫氏(写友「創造」)090-4805-8865 画像 10 枚

福島多暉夫氏(米子市写真家協会会長) 画像 10 枚

秦野のぼる氏(写友「創造」) 画像 10 枚

パク・クァンリン氏(韓国写真作家協会諮問委員)

#### ④ パネルディスカッションの流れ

(1) 近現代写真の変遷を見る (15 分) Landing Time 42min

・失われていく「時」の記録 パネラー/福島多暉夫氏

・生活は写真。生きること自体が写真 パネラー/松原幹夫氏

別紙資料 2(生活は写真 生きること自体が写真)

(2) テクノロジーを使い切る (30 分) Landing Time 72min

・暗室作業をパソコンでする時代 パネラー/福島多暉夫氏

・テクニック自体が自分の表現 パネラー/秦野のぼる氏

・開発した技術は作品表現に必要 パネラー/パク・クァンリン氏

(3) 写真の未来は何を目指すか? (30 分) Landing Time 102min

・芸術する写真・記録する写真 パネラー/秦野のぼる氏

写真を撮ると言う事(資料あり)

- ・自然と人間、新しいものと古いもののはざま パネラー/松原幹夫氏  
別紙資料2(自然と人間 新しいものと古いもののはざま)
  - ・写真は表現手段の切り口の一つ パネラー/福島多暉夫氏
- (4) まとめ⇒パク・クァンリン氏 (15分) Landing Time 115min

## 基調提案

### 1. 写真の絵画的表現と発想 朴光麟(パク・クァンリン) 韓国写真作家協会諮問委員

#### 1. 芸術としての写真

写真は発明初期から芸術を念頭に置いて誕生したものではない。単に絵画の補助的な手段や記録を目的した手段としてメディア界などで発展してきた。意識の（心ある芸術家達によって）写真を一つの芸術としてとらえ、個々の感性による表現の自由またメディア界においては技術的に格段に進歩してきた。また、新しい表現と美学を研究して試みた末に本格的に芸術として認識されることになり、これを機に、視覚芸術分野に非常に重要な位置を占めることになった。その後更に、記録を越えて媒体表現としての無限の可能性を発見することになったのだ。

現代写真は従来のアナログ技術とデジタル技術と融合・合体し、新たな概念と見方に（価値観が）変貌した。デジタルは現実を再現した結果を簡単に再構成したり、現実には存在しないものも想像力で生産できるようになったし、あるいは画家もデジタルプログラムを利用して作業できる範囲が拡大した訳で、写真と絵画の境界がだんだん崩れている。

この時点で、写真芸術はメカニズムの機能活用に写真だけの独創的な芸術性と作品性のために、作家の表現意識（より研ぎ澄まされた感性へと）を創意的に変えていくことが重要（ポイント）であると思うし、そういった表現が認知されてくると思われる。その過程を充実させた結果こそが、芸術としての写真と認識されるだろう。

#### 2. 絵画的表現の変化

20世紀初めにも絵画的な写真があった。写真での絵画的な表現は、さまざまな方法があったが、当時は機械的な機能が単純な柔らかな焦点のみを利用したギンエン写真(モノクロ)がほとんどだった。このように写真の臨場感や繊細さよりは、絵画的な効果を持つて来るためにそのような方法が唯一だったのだ。

デジタルカメラが出る前のわずか十数年前までは、特別な効果を出すためには暗室でモンタージュ(montage)技法で焼き付けし、計算された画面を頭の中に想像し、機械式アナログカメラで二重露出撮影を行っていた。

今に至ってはデジタル化への進化で手軽に絵画的表現が容易になった。しかし、このような技術的な方法だけでなく、色感や質感、形状などが抽象的な被写体を一つの撮影だけでも絵画的な感じの写真になることができる。

しかし、この場合にはどんな内容を用いようとしたのか、作家の主観的意識がハッキリしなり、写真自体が曖昧になる可能性があるので慎重を期さなければならない負担（リスクを背負うことになる。）が伴う。

#### 3. 絵画的表現方法

##### A. 多重露出機能の活用

二重、または多重露出は被写体の質感の変形や物体の形状が暗くなる。これは、見る人によってそれぞれ異なる可能性があるが、写真の生命力を失っていくと見ることもできるかと思えば、むしろ元の形に完成されていく過程の瞬間として見ることもできる。または目で見られなかった無形の空気さえも一緒にいるという深い想像をするかもしれない。重畳された写真であればあるほど多くの瞬間と時間たちが一緒に積もっていて抽象化をみるように写真で気軽に読めない謎のような感じを受ける恐れもある。しかし、図の非構想のように絵画的な写真作品はそうしたものだ。誰でも見た通りに考えて判断することが答え

であることだ。

このように形態を可能にする線が不明で、かすかに明らかになった形状を以前の姿で描いてみるようになり、見る人の感情の状態によって、また記憶と経験に応じて自由に再解釈されて判断することになる。

また、写真は再現することから脱し、再現と非再現の間にある写真、構想と非構想を混合したそのような写真、非現実的な夢や夢想的に映し出される写真がどうすれば、最も絵画的表現に充実しようとした写真ともいえる。しかし、多重露出撮影手法は何コマが重畳されたかによってそのイメージの鮮明度の差が激しく現れるので、適切な露出回数を決定することが重要であり、明確にすべきものは写真家が作品を通して何を伝えんとするメッセージだと思う。

#### B 長露出を利用した表現

長露出、つまり遅いシャッターのタイムで撮影する写真は、一般的に風景や自然を対象とする場合が多い。また、長露出写真の中に人物をテーマに構成すれば、より美しい結果を得ることができる。

人物の動きを通じて、時間の流れを視覚的に分かるようにして停止された瞬間よりもっと深く豊かな物語を保存することができる。しかし、人物と一緒に撮影した場合、風景一つだけを表現する際により考慮すべき点が多い。シャッター速度が長くなるほど、人物は幽霊のように足跡のみを残して消えることになって、人物を静的に表現しようとする時には人物が不動の姿勢を維持するのは容易でないからだ。

シャッタースピードは露出いつも相対関係にある。極めて定められたシャッタースピードは決して存在しない。

長露出写真は風が吹く日の波や、雲、木、草などの動きがある背景を選択するのがもっと効果的であり、ある程度時間をかけてシャッターを切るかという判断力は数多くの反復的体験によって習得できるようになる。

これらの条件に調和を成し、完成した結果物を見たら、それこそ現実ではなく、夢や幻想などが持つ夢幻的なイメージ、次第に時間の中に消えていく残像らが寂しかったり、残念な気持ちを感じさせるものだ。

#### C Tilting と Pannig テクニックの活用

この方法は撮影場所や素材の選択が非常に重要である。張露出技法と一緒に適切なシャッタータイムと上、下、左、右のカメラの動きの度合いによって成功するかどうか決定される。しかし、すべての作品と同じように、成功した写真としても多くの人たちは特定の方式のどんな技術による結果であるかどうか気にするが、その写真がどんな感じや言葉を伝えようとするのか作家の意図についてはあまり重要に考えていない。したがって、ティルティングやペンニン手法の活用はあまりひどく流した写真よりはある程度説明的であってこそ、いいだろう。

そのためには適切なシャッタースピードを決定して反復的なシャッターティルティングを通じてのみ得られる

#### D photo shop program の利用

上記に記述した内容はカメラで完成される表現方法の代表的なものだ。カメラでは同じ場所と時間に同一の被写体を撮影して絵画的に表現するのが一般的だが互に他の時間と場所で撮影した結果物をフォトショップで完成することも一つの方法だ。もちろん、フォトショップ・プログラムには撮影された結果を簡単に抽象的、または絵画的な効果を出すことができる別途の機能もあるが、ここでは、徹底してそれぞれ撮影された二に枚の写真を持って作業することをいう。これは組み合わせられた結果物相互に調和をなす内容なら

理解するのに無理がないだろう。しかし、近來の写真芸術はそのどの領域に限定されたり、縛られない傾向がある。つまり重畳される二つのカットの写真が極と極の相反する内容であったとしても関係しない。それは作家の主観的てきな表現としなければならない、これを尊重しなければならない。ただし、フォトショップでは重なる過程でコントラストが著しく落ちる恐おそれがある。これをある程度補完できる明暗の割合について神経を使わなければならないこともまた重要な課題である。

E また、違った方法の表現

この他にも遅いシャッターのタイムで三脚を使用しないまま、カメラを振ったり、効果を極大化するため、小品やその他オブジェの使用を例を挙げる。例えば、ガラスの表面にワセリン、または透明なクリームなどを不規則に塗布し、これを通じて撮影することとして被写体の部分的変形を図って効果をつけることはできるが、不自然で、作為的な方法は、低級の内容に見えることができるという点を留めておかなければならない。(留意しておかなければならない。)

#### 4. 写真を見る観点

写真は、(その被写体によって) 人物、風景、ドキュメンタリー、静物など写真に登場する対象とジャンルによって、または写真家の作品論によって写真の画風や色は絶えず変化する。風景を撮るための作家、松だけに固執する作家、人物や野生花だけが好きな作家など自分の好きな被写体を別に持っている。どのような写真であれ自分だけのスタイル(スタンス又は分野)を見つけることは非常に重要である。このように一つのテーマを集中し研究して作品を完成して展示する作家が多いということは望ましい現象だといえよう。今は写真が美術館比較的手厚いもてなしを受ける方だが、作家の…」ではない機械的な力を借りた創作物という理由で他ジャンルの芸術と比較して今は良い待遇を受けてない。もちろん写真の偶然性と複製性(コピー技術)については、どうしようもない事実だが、今後、どのように多くの認識の変化と進化をしてかを押し図ることは大変難しい。

ここに記載した内容は、筆者がお気に入りの撮影の分野を主観的な観点から記述したものである。いくつかの側面では、意見の相違を有する人もいるだろう、そのことについては私には関係ない。写真は誰でも結果に従わなければならない。いくつかの言い訳も成立していない。だから「写真家は写真で語るしかない」という話が出たのかもしれない。子供の頃絵が好きだったが、絵の代わりに写真をすることになったのがどのくらいの幸せなことかわからない。

## 2. 写遊『創造』 松原 幹夫

(作品・行動・思想などの根底を一貫して流れる基本的な考え方)

私が写真と出会ったのは今から28年前である。当時32歳の私は精神を病み途方に暮れていた。このころ声をかけてくれたのが高校からの友人である。写真に打ち込むことで、病んでいた精神もすっかり回復し今に至っています。

写真は何かと聞かれれば、即答で『生き甲斐』と答える今日この頃です。

私の撮影スタイルは当時から一貫して『撮りたいものには食欲に！』です。そして撮影にあたっては、『被写体と対話する』と言うことです。写真を始めた当初は風景に魅力を感じ、年間を通し、この場所でこのような状況になったらシャッターを切ろうとイメージを膨らませ、時期を待つ。撮影場所に着けば、被写体と対話し構図を決める。待つこと数時間、イメージ通りにならなかつたらシャッターを押さずに帰ることもありました。

20年の節目に風景の集大成として写真集を発刊。次なる新たな挑戦として、心象風景に取り組みました。現代フォト・表現への挑戦『朽ちゆく物たちの創造』です。ある物体に

付着した錆、傷、汚れを切撮り、魂を吹き込むことで復活させる！魂を吹き込まれ復活したものが心象風景であったり、時空を超えた生物であったりと、誰も試みたことのない面白い世界だと自負しています。この場合でも『被写体との対話』が大切です。対話することで魂を吹き込み作品として復活させる！『仏作って魂入れず』という言葉がありますが、写真撮って魂入れずでは作品が生き生きしません。この魂を入れるとは何か？被写体と向き合って時間をかけて撮影することにあります。それが『被写体との対話』です。構図、切りとり画角、入光位置と様々なことを被写体から学べます。また、そのときに作品になるものが撮れてなくても、その被写体に魅力を感じたなら、日時を変えて撮り直しに行くこともしばしばです。『撮りたいものは必ず撮り切る！！』という貪欲な姿勢です。デジカメならその場で確認もできるでしょうが、私はフィルムカメラですから現像して初めて確認できるわけです。なぜデジカメを使わない？と思われるでしょうが、『必要を感じない』の一言でしょうか。前述しましたように、じっくり構えてシャッターを押しますから数コマの撮影でOKで経済的です(笑)。またフィルム撮影での期待感もあります。現像が出来るまでのワクワク感。何よりもデータ喪失がない！フィルムは現物を紛失しない限り残ります。

『消えるデジタル、残るフィルム』『フィルムは撮る文化、デジタルは消す文化』との迷言もあります(笑)。ただ利便性はデジカメに勝るものではありません。プロ(報道・商業用)向けに開発されたとあって、迅速なる情報の伝達では現代社会から切り離せない存在ではあります。『撮る文化』を取るか『消す文化』取るかは、用途目的に合わせて使い分けながら楽しめたらいいのではないのでしょうか？

『自分の感性で捉えた主題を一生追い続けるのが芸術家である！』(石原慎太郎)  
私は、正にこの言葉通りの写真人生を歩んでいます。自分を信じて、自分の道を歩むことが大事。そして、『自分だけの一枚を！』『自分にしか撮れない一枚を！！』で、現在に至っています。

### 3. 写真を撮ると言う事

#### 秦野のぼる(倉吉市在住写真家)

□写真を撮ることが日常になった現代、アマ・プロ問わず写真家は何を撮るのか。

#### 写真と芸術

現代の写真とは「**今、世界で起きている様々な問題を考えるきっかけを作る作品**」と考えているがどうだろうか。そう考えると、ただ美しいだけのファインアートやノスタルジーは、**考えるきっかけを奪う**ことになり、今の時代の写真には必要ないのかも知れない。

哲学とアートは、同じこと。哲学の実践がアートともいえる。どちらも、ただ単に生きて行くには必要不可欠なものではない。しかし、人間として「よりよく生きよう」「より美しい生き方」を考えた瞬間に、アートは必要必至となる。**人間として、どう生きるかを考えるきっかけを作るのが、哲学でありアート**なのだ。

現代のアーティストたちは常に社会性をはらんで表現作品を制作してきている。だから、そこには色濃く時代性が残るのである。社会性を持たない趣味性の高い絵画や写真・工芸等やエンターテインメントが、現代アートと区分されるのは「単なる慰みものや美しいだけのものや娯楽は、**考えるきっかけを奪う**」からである。

欧米で現代アートが盛んなのは人種的、宗教的にたくさんの問題を歴史的に抱えていて、常にそれを考えざるを得ないからである。そのような問題が少ない日本のアーティストは、「生と死・老と若・高と低に代表されるように、もっと根源的なものを突き詰める」人が多いように思われる気がする。

太古の昔、祈りが祈禱師による1声部モノフォニーの頃に、生け贄と言う行為が続けられていた。そこに複数の人々の声部を用いたポリフォニーが産み落とされて聖歌隊や囃子により歌い奏で、それに合わせて舞うダンス等が生まれる。すると、人の間に瞬く間に広がり宗教と言うモノが派生して生れた。それにより生け贄と言う行為が無くなり同時にカニバリズム（食人）も消えたのだ。これが地球上で初めて「**新しく存在する事で変革が起きる意味の提示とその共有**」= **芸の術・ART** が生れた。

結局、アートとは「いかに良く(美しく)生きるか」を、皆で考えるきっかけになっているか、どうかなのだ。

写真は、メカニズムの発展で、単に写すというテクニックの問題は既にある。誰でもシャッターを押せば、それなりに立派な写真が写る。だからこそ、「今、世界で起きている様々な問題を考えるきっかけを作る作品」を目指さなくては、写真家としてのスタンスを失うことになる。

## 現代の写真を考えるキーワード

- ・どこからアートと言えるか。
  - ・現代写真家の奥深い世界
  - ・タイトルで変わる写真の印象
  - ・写真で何を伝えられるか
- 現代社会の情勢や問題を反映し、美術史や社会への批判性を感じさせる作品を現代アートと呼ぶのでは。
- 写真を素朴に撮れない時代、それが現代。
- 作品をきちんと評価し、勝ちづけるメソッドが必要。
- ジャーナリズムやアマチュアは印象批評に偏っているのでは。

□美術教育⇒無根拠な自由ばかり尊重して、方向性を見失っているのでは。

芸術には⇒鍛錬や就業が必要だが学ぼうとしない。

独りよがりで稚拙な作品しか作れない⇔尖鋭性が無いのが現代か？

□ポピュリズムの中で育つ才能を、大きく育てる仕組みが無い。

そこそこ、楽しくやっていると安心している

芸術には⇒興味もないし、拮抗する心の内を嫌い、労力を惜しむ⇒楽しくやっているから

※地方自治体が町おこしと称して、アートを利用するから→アーティストも「らく」な仕事をしている

無根拠にモノづくりを奨励しすぎる

□主体性を持って、社会を変えていかなければならない。一人の写真作家(芸術家)として行動を起こすべき。

□自分の作品が世間に認められようとして、仕事をしているわけではない。本当に、世の中を変えたくてやっている。絵をかく、写真を撮る、彫刻を作る、その活動を通じて人々を目覚めさせるのが芸術の仕事。

芸術ごときで世の中は変わらない。芸術は現代社会では無能、無意味。

↓

しかし、やり続けるしかないのでは

芸術家が、もだえ苦しみながら活動する姿を、市民に見せることで、人々は鼓舞され、勇気づけられる人々がきつといるものだ。

□誰のために、何のために表現するのか

様々なモノや空間を画面に盛り込める写真は、「物語」を紡ぎやすい。

見る人々が、自分に引き付けて、いろんな解釈をしてくれればいい。

- ・完成度の高さと普遍性が大切。
- ・自分の存在をストレートに示す表現は新鮮だ。

□写真論

写真を撮ると言うことは、結局のところ写真家の直観と直感である。

**写真は単なる楽しみではなく、**

**人生の矛盾を問い、**

**その意味を手探りするための「道しるべ」であるべきだ。**